

ザ・ボロジエ原発

絶波り

ロシアのウクライナ侵攻で、ロシア側が占拠する欧洲最大のザボロジエ原発が、砲撃を受け、外部電源を喪失。まだ稼働中の1基の電力で、ほかの原子炉を冷却するという異常事態になっている。原発がいかに脆弱で危険かまさに見せつけているわけだが、この現在進行形のリスクを無視するかのように、岸田文雄政権は原発の再稼働推進・新增設を掲げている。このままでいいのか。（山田祐一郎、岸本拓也）

ロシア占拠下、砲撃受け電源喪失

「最悪メルトダウンの可能性も」



ウクライナのザボロジエ原発で調査に当たるIAEAの調査団=1日（タス・共同）

ウクライナに侵攻したロシアが今年二月、稼働中だったザボロジエ原発を攻撃し制圧して以降、占拠を続いている。度重なる砲撃により、同原発は危機的な状況だ。

八月上旬以降、同原発付近で攻撃が相次いだことを受け、国際原子力機関（IAEA）の調査団が九月に入り同原発を視察。今月六日に公表された調査報告書では、調査中に原発近辺での砲撃があったことや新燃料貯蔵施設や放射性廃棄物が、八月以降、原発施設へ

所から「外部電源」として四系統の送電線が延びている。外部からの電力は、原子炉の冷却や運転など、安全性の維持に必要となるが、八月以降、原発施設へ

物貯蔵施設などがある建物で被害が確認されたことが明らかに。原発にとどまるウクライナ人の運転員が、一部の区域に自由にアクセスできず、稼働や緊急時の対応への懸念も示された。

欧洲最大のザボロジエ原発は1~6号機（各百万瓩）が並び、近接する火力発電所から「外部電源」として四系統の送電線が延びている。外部からの電力は、原発でも平時は一週間分の燃料が備蓄されているというが、「戦争状態であり、どれだけの量が確保されているかは不明。燃料の確保がロシア側の交渉や収支の手段として使われかねず、最悪の場合、メルトダウン（炉心溶融）につながる可能性もある」と強調する。

NPO法人「原子力資料情報室」の松久保謹事務局長も「ザボロジエ原発は、既に外部の送電がなくなる状況を何度も繰り返している。6号機を止めたくても運転せざるを得ない状況で、非常にリスクが高い」と現状を説明する。また、IAEAの報告書で

の攻撃が相次ぎ、外部電源から切り離された状態だ。機が「三・五万台に出力を落として原発全体の電力を賄っている。「何らかのトラブルで6号機が停止した場合、深刻な状況に陥る」。原子力規制庁で緊急事態対策監を務めた長岡技術科学大の山形浩史教授（システム安全工学）は危機感を募らせる。

6号機も止まれば、非常用のディーゼル発電機も使うことになる。ザボロジエ原発でも平時は一週間分の燃料が備蓄されているというが、「戦争状態であり、どれだけの量が確保されているかは不明。燃料の確保がロシア側の交渉や収支の手段として使われかねず、最悪の場合、メルトダウン（炉心溶融）につながる可能性もある」と強調する。

IAEAのグロツシ事務局長は、同原発周辺で相次ぐ攻撃を「壊滅的な出来事が起きる恐れがある」と非難する。ロシア、ウクライナ双方が相手による攻撃を主張しているが、報告書では攻撃がどちらによるものかは触れていない。

同原発を巡り、攻防が続くのはなぜか。筑波大の中原逸郎名誉教授（ロシア研究）は、今年十一月にインドネシア・バリ島で開かれ、ブーチン大統領も出席予定の二十カ国・地域（G20）首脳会議を挙げ、「停戦交渉の材料にしたいといふ思惑があり、お互いに危機があつておつている」とみる。その上で、「これまで決戦打がなく、双方に焦りがある。国際舞台での停戦」という流れに向け、今後一二ヶ月、最も緊張が高まる可能性がある」と話す。